1994年（平成6年）
NO. 8号
日本山岳会山形支部
事務局　山形市和合町2-3-7
真田　匡三方

平成六年度山形支部総会

―上高地山研行などの事業計画―

六年度の支部総会は、四月二十四日（日）十時半より朝日村熊出「かたくり荘」において大橋支部長以下二十一名が出席の下、行われた。

五年度の主な行事は、意欲的に県外遠征を二回実施　利尻登山　七月三十日～八月三日　十一名（やまNo.六に掲載）エベレスト山麓トレッキング　十二月二十八日～六年一月五日　七名参加（やまNo.七に掲載）、その外東北地区集会が山形担当で、山形市近郊の瀧山で開催され四十六名の参加を得、有終の美で終えた。また、恒例の晩餐会は赤倉温泉で十八名が出席して開催された旨を報告。

なお、事務局員として長岡伸恭会員が追加承認された。

六年度の主な行事は次のとおり

六月五日　新庄神室・火打岳
六月二十六日　山形神室岳（清掃登山）
八月下旬　上高地山研（穂高連峰）
九月十日　東北地区集会（宮城・七ツ森）
十月下旬　鳥海山（清吉新道を歩く会）
十二月十日　支部晩餐会（温海温泉）
七年二月　樹氷原を滑る会（蔵王山）

会員異動

（入会）

No.			
一一五一七	東海林　敬	山形市山家町	
一一六三七	鈴木　理夫	余目町字沢田	
一一六四九	高橋　治	新庄市石川町	
一一七六二	田中　洋子	村山市楯岡	

（物故）

No.			
五八四三	佐藤富佐雄	H6・4・20	
一〇六六三	清水弥栄治	〃 6・5	

平成6年度予算書

収入の部

科目	本年度予算額	前年度予算額	増減
繰越金	52,508	70,340	△17,832
支部還元金	75,000	80,000	△ 5,000
会費	100,000	100,000	0
雑収入	2,492	9,660	△ 7,168
計	230,000	260,000	△30,000

支出の部

科目	本年度予算額	前年度予算額	増減
会議費	80,000	80,000	0
事業費	60,000	70,000	△ 10,000
事務費	35,000	60,000	△ 25,000
旅費	30,000	20,000	10,000
雑費	10,000	0	10,000
予備費	15,000	30,000	△ 15,000
計	230,000	260,000	△ 30,000

平成5年度決算書

収入の部

科目	予算額	収入済額	増減
繰越金	70,340	70,340	0
支部還元金	80,000	75,000	△ 5,000
会費	100,000	122,000	22,000
雑収入	9,660	206	△ 9,454
計	260,000	267,546	7,546

支出の部

科目	予算額	支出済額	増減
会議費	80,000	72,090	△ 7,910
集会費	20,000	52,500	32,500
調査費	10,000	30,000	20,000
消耗品費	20,000	4,407	△ 15,593
通信費	60,000	21,543	△ 38,457
やま発行費	40,000	15,558	△ 24,442
雑費	30,000	18,940	△ 11,060
計	260,000	215,038	△ 44,962

目次

●平成6年度総会報告
●いま住んでいる周辺の山
●蛤岳
●事務局長を引き受けて
●雪の来た山で考えたこと
●93年　東北集会「瀧山」
●丁岳回想
●天山の雪崩そして鳥海山の雪崩
●スキーイン・カナダ
●キナバル登山行
●清水弥栄治氏追悼

題字について

筆者は工藤聖泉先生。村山市在住。日展3回を始め各書道展入選多数。「や」の字の右肩は、きり立つ岩壁を表現したと申しております。

「いま住んでいる周辺の山」

大橋克也

最近は仕事が忙しいのと、体力特に脚力の劣えを感じてもっぱら日帰りで近所の山を歩いている。そうやって歩くごく身近な山に改めて良さを見出すことが多い。私の場合それは、富神山や水晶山、雨呼山などである。

富神山は、山形市の西に端正なピラミッド型で横たわっている。よく目立つ姿は「あっ、あの三角山か」と誰れにでも知られている山である。登路は南、北、西の三つあり、南コースの柏倉からの山林の径には、はくびしんの糞などを見ることがある。その頂に立てば、山形の目ぼしい山々が三六〇度に展開し、眼下に山形市街が一望の下に見下ろせる優れた展望台であり、気楽に親しんでいる。

関山峠路からほど近い水晶山も登る人の少ない静かな山である。杉の深い林が道を暗くするほど覆っていて、その樹間を走り廻っている玲羊を見ることができる。

雨呼山（アマヨバリ）はその名の通りの雨を呼ぶ山だった。この間、天童の貫津から登ったが、雨と霧に濡れながらの登行もそれが快いと思えるほどの山だった。白く漂うガスに見え隠れするブナ林の中を、三角点を探してガサゴソ藪を分けた感触が今でも私の手や足が爽やかに覚えている。

私の場合の日帰りの山は、身近にあってしかも人知れぬ静寂さを保っているような低くとも深い山なのである。ひとつの山巓に立つと連鎖的に次はあの山に登りたいと夢と願望が湧いてくる。それを「連鎖反応病」と称した岳友もいるほどだ。私には、三吉山の頂から東に望見した上山葉山に誘われるように登ったことなどが、この病に当てはまるのだろうか。

私達の周囲には、意外なほど未だ登っていない個性のある山が沢山ある。こう云った身近な山々はじっくり歩けば、必ず応えてくれる何物かを持っているのである。

蛤岳

菊地俊彦

程度の差はあっても、総ての岳人が憧れと思いを寄せるエベレストを見ることが出来ました。まずもって、仲間にお礼を言わなければなりません。

エベレストには色々の呼称があって、ネパール政府は「サガルマータ」に統一しているようです。シェルパ族は「チョモルンマ」、「チョムランマ」、チベットと中国では「チョモランマ」、英国、印度では「エベレスト」、エベレストと命名する前までは「ピーク一五」でした。いずれも正しい呼び名で甲乙を付けることは出来ません。

日本でも珍しい事ではありません。岩手、秋田、宮城三県境にまたがる栗駒山があります。栗駒山は岩手、宮城両県の呼称で、秋田県では同じ山を須川岳と呼んでいます。この二つの山名は時間と共にどちらかに統一されるということはないでしょう。何故なら公の地形図上に二つの山名が併記されているからです。

一：二五〇〇〇地形図
NJ-四-二一-一一-二
（仙台一一号-二）ささやとうげ
五七四〇-二三

これは、国土地理院によって平成五年二月一日に発行された二五〇〇〇分の一「笹谷峠」地形図の名称です。

山形市街地の東に穏やかにうねりながら次第に高まりを見せる魅力的な山は、この地形図の北東端、山形宮城両県境に聳える標高一、三四四・二メートルの「山形神室岳」と記載されている山ですが、勿論その東に連なる一、三五六メートルの「神室岳」に由来するのでしょう。

山形の方々は長い間この山を「蛤岳」（はまぐりだけ）と呼び親しんできました。初雪をいただき夕日に映える高まりは「蛤」にそっくりです。山形の若い登山家の殆んどが山形神室と読んでいる現在、もはや蛤岳という歴史的な山名は消えていく運命にあります。勿論、有耶鳥、無耶鳥が峠の上空を舞っているころから伝承されてきた「カケス岳」も消えてしまいました。

地名や山名の背後には長い人間の歴史と文化が豊かに内蔵されていることを前提とし、綿密な聞き取り調査の上に立って作られた地形図に思いを寄せながら蛤岳とカケス岳に別れを告げなければならないのでしょうか。

事務局長を引き受けて

真田匡三

私は、平成五年五月九日の日本山岳会山形支部の総会に、欠席したところ、役員改選期につき支部の事務局長になって貰いたい旨、突然電話連絡があり驚いた次第でした。

六十歳を越え、司法書士の業をしている今、また、昭和六十三年八月に、左足骨折により七カ月入院し、

山登り等は到底無理なので、強くお断りしたのでしたが、どうしてもと強い要請があり、近くに大橋支部長も居る事だしと云う訳でお引き受け致し、五月十八日前事務局の「菊地・清水・佐藤氏」の名コンビから、「真田・会田・三浦」へバトンタッチしましたのでよろしくご協力お願い申し上げます。

実は、以前山形県山岳連盟の事務局を担当していたので、知人・岳友が多く居り心強く思って居りますが、何せ登山ができない身なので不安が一杯でしたが、皆様のご協力により一年が無事経過しました。

昨年は殊の外、東北地区集会があり、県外遠征として北海道（利尻岳）及びヒマラヤトレッキング（韓国・雪岳山以来）等梅津氏の意欲的な計画により実行されたことは特筆されることと思います。

今後は、事務局の一員として皆様のお役に立ちたいと考えて居りますので、なお一層の御指導と御鞭撻の程よろしくお願い申し上げる次第です。

雪の来た山で考えたこと

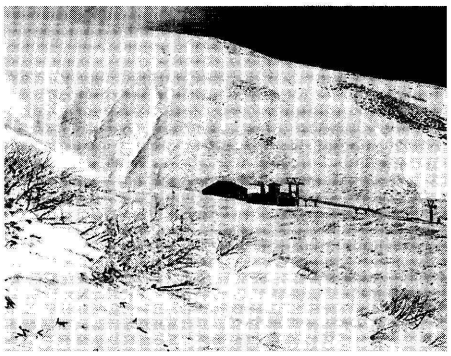
木村 喜代志

駐車場から滝の小屋への登山路入口に、「犬猫連れ登山お断り」の立て看板がたてられています。理由は、動植物の生態系を守るためと書かれていました。「納得」とうなずく前に、何故という疑問の方が先立ち、小首をかしげてしまいました。

酸性雨、オゾン層破壊、野生動物の保護等などでもわかるとおり自然保護、環境保全はボーダーレスの緊急課題です。しかし、その方法、規模となると、主義主張がからみ、さらには生活の豊かさからくる多様な価値観から様々な意見に分かれてしまいます。地球的あるいは全国規模的なものは、行政側に委ねることにして、ここでは最近山で経験したことで、小首をかしげてしまったことを、一緒に考えていただければ幸いです。

雪便りを聞くと、スノーボードを抱えた若者達が月山に集まってきます。その数は年々多くなり、スキーヤーをはるかにしのぐまでになりました。しかし、車道が雪のため閉鎖され、他所のスキー場オープンとともに波が引くかのように姿を消してしまいます。かわって、スノーモービルが五台、七台さらには一〇台と連なって姥沢まで登ってくる時があります。そして広大な雪原と化した駐車場に形成された凹凸を利用してレースまがいの走行がはじまります。その耳を引き裂くばかりのエンジン音と鼻をつく排気ガスが、冬の月山の自然界の静寂を引き裂きます。野生動物は自然界の音にはあまり反応しないが、人工的なものには敏感だと聞いたことがあります。厳しい冬を迎えたばかりの動物たちにとってはどんな影響を与えているのか気になるところです。

ブルーラインの開通した鳥海山で見られます。ときには一〇台もの列をなし、静かでのどかな春山にはそぐわない音と匂いを撒き散らしてお浜近くまで上って来ます。野生動物保護の一方法が人間との共存・共生だとしますと、この季節ぐらいは野生動物の領域にしてやるべきと思います。あまりにも自然界の摂理とかけ離れた行為に対し、国立・国定公園としての何らかの規制はないのでしょうか。



冬の月山

雪を待ちわびるのはスキーヤーも同じです。昨年、月山のリフト乗り場に通じる車道をコースに見立て、大人たちが雪を寄せ集めポールをセットし子供達を滑らせていました。スタート地点では、コーチがクラウチング姿勢をとらせて一人一人を送り出していました。一見ほほえましく思える練習風景も、大人に守られているとは言え余りにも当たり前の顔で滑る子供達と、歩行者に道路の端を歩くことを強いる大人の顔に、妙な気持ちになってしまいました。雪を求めて来た大部分の人々は、ここから十～二十分も登った所の豊かな雪におおわれた斜面で楽しんでいるというのに、彼らだけが駐車場からつづく道路を練習場にしているのはどうしてなのだろうか。

彼らの行動が、今々自然保護と直接的には結びつかないにしても、スポーツというものを通して子供達の心の中に特別意識的なものが芽生えないものかと気になりました。といいますのも、自然保護等で最も求められているものが、特別意識の除去そのものであるように思えるからです。

東北支部集会

「瀧　山」

♤玲羊が出没し、あかもだしが群生する山♤とのキャッチフレーズで呼びかけた九十三年東北支部大会「瀧山の集い」は、東北各地から四十六名の参加を得て盛会裡に開催された。

九月十八日（土）の午后から先づ東北各支部会議が行われ、JAC小倉茂暉常務理事の挨拶と現状説明をいただき、各支部の現況報告と今後の東北集会の在り方について意見の交換を行った。そこで、東北集会は形式にこだわることなく、各支部の山行を中心として組み立てた姿で気楽にやってゆこう、と継続の方針をまとめた。また青森の松島氏から本年中に青森支部結成予定の報告もなされた。

引き続いて地元公民館長・鈴木健治郎氏による「瀧山の歴史と伝説と文学と」との題の講演の後、十八時から懇親の夕が開かれ、山形名物の芋煮の鍋で会は大いに盛り上った。

（大橋　克也）

・東北集会「瀧山」（二日目）

紅葉の盛りには未だ早いが瀧山に於いて東北集会が催された事は地元の我々には毎日の様に眺めている山だけに大変喜ばしい事であった。

幸い天候にも恵れ、慈覚大師が開基した由緒有る霊山にて、かっての栄華を偲びながらの集会は東北・関東各地からの参加の岳兄諸氏には有意義にまた印象に残った事だろう。

牧場サイドから霊山神社までの緩やかなアプローチから、九〇〇メートル附近からの一気に高度を上げる醍醐味、ウメバチソウ等の花々に疲れをいやしながらヘラハギを経て山頂への登路は標高こそ低いがバラエティにとんだ充実した山行と云えたのではないだろうか。

下山は姥神（乳母神）コースを辿り、邪念と悪霊まで剥ぎ取られ全員身を清めて下山となる。

終りに今回の山行に御協力戴いた山形山岳会各位に御礼申し上げます。

（長岡　伸恭）

丁岳（ヒノト）回想

金森　繁三郎

私が酒田市に移り住んだ昭和二十三年、たまたま町の古本屋でみつけた「樹氷」という本には、蔵王と周辺の山々の紹介と、丁岳の紀行も載っていた。著書でもある山形高等学校教授安斎徹氏が、昭和初期の残雪期を利用して、明神沢から登頂したものであった。当時さほど心にとめていなかったが、鳥海山から眺める、鋭いなかにも重厚な山容に、いつしかひかれるようになった。

昭和二十六年六月、思い立って先人と同じルートから試みることにした。自分の足だけが頼りの時代、北青沢から峠を越えて、真室川町平枝に下り、職場の同僚の生家に泊めてもらった。翌日も止まない雨の中、明神沢出合から遡行を始めた。両岸が迫り、滝の連続する暗く陰うつな渓谷を、約三時間登り続けた。

水勢は増すばかり、ガスは低くたれこめ、山頂はおろか、尾根筋すら全く臨めない中、登頂を断念せざるを得なかった。

次いで、昭和二十八年八月、秋田側水無地区に在った、営林署造林小屋に泊めてもらい、現在の山径（当時は営林署管理歩道）から頂上に立つことができた。帰路はバスもないので、水無大森のコルから大川に下り、夜川岸に寝て翌朝真室川に下った。その後も山仲間と再度大川を遡行したり、甑峠越え、男加無山登頂と、この山域へ集中した時期もあった。一昨年、支部山行で、新しく切り開かれた周遊ルートを、二回も続けて歩き、四十三年前の失敗がほろ苦くも、愉しい思い出として甦ってきた。戦前この山には径もなく、昭和初期までいたと言われる丁行者が辿ったルート（行者みち）を、地元岳人は時々登るそうである。険しい岩稜と岩壁をつたって、頂に達するものであるが、私も昭和初期の生まれ、当時の行者の姿を思い浮かべながら、一緒にこのルートを登ってみたいものと思っている。

天山の雪崩そして鳥海山の雪崩

佐藤 淳志

一九九三年八月四日、十時五十五分、その時私は中央アジア、天山山脈最奥部南イニチェク氷河からセミョーノフスキー氷河に入って、セラック帯の中に設営された標高五、一五〇メートル・第二キャンプにいた。前日ここからハン・テングリ西稜とチャパーエフ北峰コル直下五、九〇〇メートルの第三キャンプまで、五時間がかりで荷上げしたコースを四十五分で降りたこともあって十時に着いてから、かれこれ五十分もテントの側でボンヤリと後から来るはずのメンバーを待っていた。正面七、四三九メートルのポベーダをはじめ中国国境に連なる六、〇〇〇メートルクラスの峰には何一つ遮るものはなく、日差しは心地よく防寒具を通して身体を暖めてくれた。順応を兼ねて行動している為、今日中全員ベースに戻るよう隊長の指示であるが、思うように身体が言うことを聞かず、第二キャンプへの下降をためらっての、のんびりであった。その時、キーンと言う金属音がチャパーエフ側から発して巨大なアイスブロックがおちてくる、三十五分前にも同じ地点から雪崩れていたがそれを遥かに上回るものでこれから下るセミョーノフスキー氷河を埋め尽くす程の規模である。夢中でシャッターを押しているうちに、轟音と共にカメラや身体までが真っ白くなりテントがはためいた。我に返ったとき、不吉な予感が走った。私がここに着くと同時にセラック帯をぬけて下って行ったイギリス隊のことが気になりだした（一時は彼らと一緒に下ろうとまで考えた）。その後メンバーと一緒にルートの消えたデブリの上を「安全地帯まで走れ」の声で二時間三十分かけて第一キャンプまで急ぎ下ったが、口から心臓が飛び出さんばかりの苦しみだった。雪崩は第一キャンプの近くまで達し、予感は事実となり、四人の埋没した遺体の上を下る事となった。そんなショッキングな体験をして帰国してからの今年二月四日、鳥海山のイヌワシ観察四十八日目、六八〇メートル地点稜線でスキーを外し、ツエルトを張ってカメラをセットし終えたとき、足元から発生した雪庇雪崩は私を乗せて走り去った。最長七〇メートル、幸いにして発生地点最上部にいた為に二〇メートル程で止まったが、一緒に流されたチュチ（ハスキー犬）の姿が見えず、諦めた頃に最下部の方から上って来るのが確認出来た。素手で垂直に近い壁を何とか登り終えてデブリの大きさに驚き放心状態でしゃがみ込んだ。我が家からこの地点まで約二五キロメートル。何となくやるせない心境で過ごした今年の積雪期であった。

雑感

スキーイン・カナダ

梅津 博

ネパールから帰って、あわただしく仕事をかたづけて一カ月余りたってからのカナダのスキー行でした。

同行した加藤さんのこの旅にかける情熱には完全に打ち負かされました。私とひと廻り違う同じ羊年の生まれですが、十二年後の七四歳の時、私にこれだけの情熱と体力があるかは、つくづく疑問でいっぱいでした。

もうそろそろスキーもいやになって来て、さそってくれる人がいても、どうでもいいようなこの頃ですが、スキーをしにカナダへ行こうと加藤さんからおさそいをうけた時はびっくりしました。

カナダへ行っても、びっくりのしどうしで見るのも聞くのもめずらしいものばかりで、いいかげんなこの頃でも、機会があったらまた出掛けてもいいなあというのが実感です。

二月二十二日から、機内二泊、バンフに四泊して、周辺のスキー場に通ったのですが、寒いというのが第一印象でした。バンフの街ではマイナス二九度くらいで、温かくなってマイナス二三度くらいというのが普通だそうです。日本のスキー服装をし、スキー手袋をかけ朝スキー場行きのバスを待っている間でも、しんしんと寒さが身にしみるというのを味わってきました。夜に食事にでるのも大変なくらいの寒さですが、最後には、寒さにも慣れ寒さも楽しい位の夜を過ごすことが出来ました。

スキー場は一、五〇〇メートルくらいのところと思えばいいのですが、この三日間快晴とは云えないまでもまあまあの天気でしたが、やはり寒いのに変りはありませんでした。空気の逆転現象で頂上に行くに従って陽が照って暖くなるということがありました。それでもダイヤモンドダストがキラキラと舞いすばらしい光景を目にすることができました。周囲の山々もあっと息をのむばかりで、これがカナダの山という絵葉書のような美しさを胸に焼き付けて来ました。ただ、スキーが思ったより滑りませんでした。恐らく寒さのせいだと思います。バンフの街でも、靴で歩いていて滑るということがなかったことを考えるとそうではないかと思われます。スキーを滑走させてキシ

キシという雪のきしむ音を聞いたのは始めてだったと思っています。

スキー場のスケールは非常に大きく、山全部がスキー場という感じで蔵王でいえば、上の台から坊平までつづいていると思えばいいくらいで、リフトも一本の長さが日本の五本分くらいでしょうか、乗っていてまだかまだかとあきれる位の長さです。ただリフトの座席とかはおそまつで、日本のものがずっと立派だと思いました。

スキー場は混雑しているのは日本と同じですが、日本のスキー場のカラフルさが嘘のようなもので、カラフルなスキー服装をしているのは、たいていい日本人で、現地の人の服装はいたって地味で、ここでは流行などいっさい関係がないという感じでした。そしてスキーをしている人も、小さな恐らく小学校位の子供とそれに付添って来たお母さんかお祖母さんといった感じの人達と、中年あるいは老年のグループが目につきました。若いカップルとか若い人のグループはさがしてもなかなか見つからないようなもので、若くてカラフルな人種はたいてい日本人でした。

バンフ・スキー場

現地の若い人はよく働いているのではないかと思うのですが、バスの運転手がきれいな女性で聞けば二十九歳というようなのが一例で、ホテルでもスキー場でも若い人がよく働いているのが印象にのこりました。

現地の航空会社の日本人の三十歳代の女性ガイドがカナダのスキーにとりこになってしまって、カナダにのこってしまう人が多いといってましたが、或る程度真実かも知れません。

スキーばかりでなく、カルガリーとバンフとの往復に見るロッキーの山なみと大平原はまさにこれがカナダといえる光景かも知れません。

この次もしまた行けたなら、緑かがやく時期のトレッキングとドライブ、冬の氷りつく空にオーロラでも見に行きたいと思っております。

キナバル登山行

水沢 富一郎

昨年九月末から十月初旬にかけて、ボルネオ島の北に聳えるキナバル山（標高四、一〇一メートル東南アジア最高峰）に登る機会を得た。

山形山岳会の七十五周年記念登山とのことで、後藤会長を隊長として計画をたてたが、出発の段階になって後藤（G）、川原（K）、長谷川（H）、水沢（M）の四名のみのパーティーとなった。

キナバル山は、山全体が国立公園の中にあり、七五四平方キロメートルという広大な地域の中心となっている。低湿地層の植物地帯、高山植物地帯へと続き、世界でも有数な植物群の宝庫となっている。数年前、大阪で開かれた「花の万博」に展示されたラフレシアというグロテスクで巨大な世界一大きな花も、キナバル山に咲くということだった。ところが頂上一帯は花崗岩の一枚岩で出来ていて、一本の低木の姿も見られない。他の山に比べ類のない独特なかたちの山であった。

九月二十九日、私達は成田から空路五時間でボルネオ島北部、マレーシア国サバ州の首都コタキナバル空港に着いた。空港には現地旅行代理店の若い女性ガイドが出迎えに来ていた。彼女は中国系マレーシア人で日本語が上手で名刺に漢字で「愛ちゃん」と書いて、そう読んで下さいと言いながらみんなに渡した。愛嬌が良く親切なガイドであった。

九月三十日、彼女の運転する車に乗り、コタキナバルから公園に向う。南国特有の椰子並木の海岸を通る。遠くの雲の上に巨大な城壁様の山が見え、その上に哭塔状の峰々が現われてきた。思わず、喚声を上げた。やがて山道にかかり峠には現地の農家らしい婦人と子供がやせた犬と果物を並べて店を出していた。早速、車を留めて果物類を買って試食してみる。どれも味が濃く、なじめない味が多かった。公園のゲートをくぐると途中の急斜面の山ひだや谷合に点在するバラック建ての建物とは一変し、公園の管理事務所附近は風景にマッチした瀟洒な建物が立ち並び美しい花が植えられ、標高一、五二四メートルのこの地は現地の金持ちの避暑地とのことであった。

ここには宿泊施設の他に、レストラン、展示センターなどが配置されている。到着して夕方迄附近を散策し、センターでキナバル公園のスライドを見せてもらった。

第一日目の宿泊はここを少し登った所にあり、案内された宿舎は二戸建て

の棟つづきの建物が数個並び、山に向って左側の道沿いに建っていた。内部はワンルームマンションを思わせる建物で、広い部屋に炊事の設備もありベッドが二つ並び、シャワー室、トイレも付いていた。G・K。H・Mと二人ずつ分宿した。荷物の整理も終わりドアをあけて外に出たとたん、となりのドアが突然開いて外人にあいさつされ、びっくりした。きさくなアメリカ人だった。夕食は坂下の食堂で油っぽいマレーシア料理を食べた。夜、宿舎の窓からラバンラタハウスの灯と無線中継所の灯が上方に見えた。あまり静かでなかなか寝つかれなかった。

十月一日、午前四時、ピッピッという小鳥の声で目をさます。外は未だ明けず、うす暗い。宿舎の前でリスが遊んでいた。入口の前の黄色いニッコウキスゲに似た花が夜露にぬれて美しい。良く晴れて太陽の昇り始めた光を受けて、キナバル山は美しく輝いていた。

ガイドの愛ちゃんが車で迎えに来て、昨夜の食堂で朝食をとった。四キロメートルほど先の登山口、ティポホンゲートに在る登山口広場で車を降り、待っていた山岳ガイドのソッポンギ氏と合流した。彼は、山岳民族出身の小柄で身のこなしの良さそうな体つきをしていた。三人のポーターが来て、一人一〇キログラムずつの荷物に分け出発する。私達の前を各国から来た登山客が通過して行った。

山道は、モンタナかし林の中を通って行く。道はよく整備されていて歩きやすい。少し登った所でカーソン滝と呼ばれている所に出た。流れの周辺には世界一大きい苔が生えていると言われていたが、よくわからなかった。登山道の両側には美しい小さな花が咲いていた。道は急な登り坂になり木の根が露出している。堅い木で作られた階段状の道へと続く。登り切ったあたりにシェルターと呼ばれる〈あずま屋〉風の六角形の建物があって、二十人位は雨をしのぐのに良い休憩所になっていて、水道も引いてあり飲水にはことかかない。おそまつだが、トイレもそばに作られていて、道もゴミ一つないのは気持ちが良かった。コタキナバルの街が、はるか遠く眼下に望まれた。

このあたりを過ぎると苔むす密林地帯となり、苔やランが木から重く垂れ下っていた。第二シェルター（二、一三四メートル）あたりから狭い尾根沿いの坂道を登り低木の間から突き出るように高い木が出ているあたりの小さな場所に、ウツボカズラがあった。ガイドに教えられ、よく見ると水差しのような型をし、色は何とも言いがたい色である。花の中に水がたまっていて、虫の死骸が浮かんでいた。虫は花の栄養源になると言われている。

第四シェルターで昼食。雨がパラついてきてうす暗い林の中の木々には大きなサルオガセが、不気味にゆれていた。

第五シェルターあたりから疲れがぐっと出る。しばらく登った所で急に低潅木地帯になり、パナーラバンの尾根に取りつき、わずか登ったあたりで目前が展けて、ガスの切れ目に雄大な岩山が現れた。上方はガスが立ちこめて見えないが、岩ひだを流れる水が何本も白い縞模様を作り、さながら巨大な鯨が横たわっている様であった。

第六シェルターを過ぎてラバンラタのレストハウスに入る。二階建てのハウスは大きな食堂の他にシャワー室、水洗トイレがあり、各室内には電気ルームヒーターが取り付けてあった。ベッドの部屋と、スキーハウス風の蚕棚式のベッドのある部屋の二通りある様だった。三、三五三メートルの山のハウスにしては、中々良い設備であろう。客はほぼ満室である。一階の食堂に下りてビールで乾杯と言ったところで、ビールを一口呑んだとたん急に吐き気が出て、ベッドに入る。高山病だと思った。皆、年齢順に病状が現れた様であった。

キナバル山麓の子供たち

十月二日、早朝三時過頃から登山客が起き出しにぎやかだ。窓から見上げると岩山を登って行く人々のヘッドランプの光が続いて見えた。外は寒く、寒暖計は七度位だった。ガイドが迎えに来た。登頂はK・Hの両氏にまかせてベッドに戻る。五時過ぎ起きて御来光を拝す。流れるガスがやがて晴れて、全山を一望することが出来た。ゆっくり朝食をすませカメラを手に、サヤサヤ小屋辺まで登った。ここから先は、草木のない白い花崗岩の岩山が続いている。この静かな光景をながめていると、土地の人が死者の霊が集まる場所として大切にし、神々に御供物をささげた意味がわかる様な気がした。青森の下北半島の恐山が思いおこされた。写真を撮りながらハウスに戻った。間もなく登頂した二人も無事下山した。

清水弥栄治氏追悼

清水弥栄治君のこと

五百沢 智 也

便りにできる大事な男を失った痛惜の思いは、日ごとにますます深くなるばかりである。

高校山岳部の後輩だからと、清水君が私の宿に訪ねてくれた。一九七〇年四月の蔵王が最初の出会いであった。

その後、一九七四年春に私が山形の家へ戻ったこともあり、山中山岳会の春秋の例会などを通じて、すこしずつ親しくなって行ったのであるが、一九七八年の山中山岳会のネパール・トレッキング行では事務局の中心人物としてすべてをお願いし、楽しい山歩きを実現することができた。

一九八二年、私は以東岳登山中に、たまたま、タキタロウの群を目撃し、一九八四年からは、菊地俊彦先生や県の鈴木生男氏ともども大鳥池調査団の活動を実現したのだったが、この時も清水君は、山中山岳会の調査応援団を組織して、大鳥池まで皆を連れて来てくれたのである。このあたり、彼はすでに発病していたらしいのであるが、そんなことは少しも表に出すことはなかった。一九八六年、八七年の大手術後も、さり気なく、皆の為にいろいろと面倒をみたり、努力を惜しむことはなかった。

一九八八年、彼にうながされて、私は、山形市に、山形市が将来具備すべき観光案内図の作成総合計画書を提出した。彼は、その計画の一部である、蔵王山の冬山案内図と夏山案内図について、市や蔵王温泉の観光協会に働きかけ、遂に一九九〇年、その実施が決まり、一九九一年度に冬山、九二年に夏山鳥瞰図を作成したのである。

現在、市や観光協会で出している蔵王のポスターやパンフレットは、彼と私が冬の空に春の空にセスナ機で飛びまわって撮影した空中写真をもとにし、すべてのコースを滑り、歩き廻った調査が結実したものなのである。

清水のこと

佐藤 誠二

清水とは、高校の時から気が合った。互いに裕福ではなかったし、学年は違っても同じ歳だったことにもよるが、何よりも女の子にももてなかったからかも知れない。高校では一学年の違いは天と地の違いである山岳部だったので、私は先輩として威張っていたが、卒業してからは、先輩後輩というよりは同じ歳の兄弟のようになってしまった。兄弟というのは不思議なもので、彼奴はどうしているだろうと気になると、向こうでもそう感じるとみえ、顔を見せたり電話がきたりと、何となく心が通じていた。

大学のとき、夏休みにポロシャツに短パンゴム草履姿できて、「これから蔵王に行こう」という。先輩に山はそんな格好で行くものではないと教えられていたので、「何だその格好は」というと、「厚いときに、わざわざ厚い格好をしなくともいいだろう」と私の分の短パンを出した。二人ポロシャツ短パンにゴム草履姿で宝沢を歩いて行った。これが涼しくて何とも調子良い。それからは短パンゴム草履を愛用するようになったが、ついに後藤幹次先輩に見つけられ、「何だその格好は、破門だ」と叱られてしまった。それでも涼しさには勝てず、いまでも短パンゴム草履を続けている。いいものである。

またあるとき、岩魚釣りの道具を一式作れという。どうしたんだと聞くと、お前が岩魚釣りは面白いというから、俺もやってみるという。それから大分岩魚釣りに凝ったようだが、あまり上達はしなかったようである。それでも下手の横好きで、いろんなところに釣りに行っていたようである。

こんな付き合いが四〇年以上続いたが、その清水がもういないというのは、どうしようもなく淋しい。心から冥福を祈っている。

編集後記

支部報「やま」の形式を思い切って改めてみました。今までの姿も、素朴な中にキラリと光る、支部ならではの良さを持っていましたが、印刷することにより、より多くの原稿を小頁の中に纏めることができることをメリットにしました。この軽量化により、会員や他支部への送付が有利に展開するものと思っています。（O、N）

清水弥栄治氏の急逝はまことに惜しまれてなりません。急ぐままに今回は上記のお二方に特別寄稿をいただきましたが、追悼の続きを次の号にも考えております。（S）

編集委員

大橋克也、真田匡三、長岡伸恭
会田茂雄、三浦繁司